
リアルゲーム

心望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルゲーム

【Nコード】

N9200F

【作者名】

心望

【あらすじ】

私は「最高の一年が始まった」そう思った。

「ミキ！一緒のクラスだよ」

新しい一年が始まった。ひらひら舞い散る桜の花びらを見ると、「春だ」と私の心をウキウキさせた。新しい一年、中学校生活最後の一年。私は最高に楽しい一年が始まると信じていた。だつて

「ホントだ！やったね」

私は中学校生活で初めて大親友のサユと同じクラスになったのだ。

私たちのクラスは3年A組。担任はそこそ人気のおばさん。でも私はクラスのみんなで中学校生活を楽しむ！と決めていたから、この際先生はどうでもいい。

そして、このクラスには最高のメンバーが集まった。男子も女子も、嫌いな人はひとりもいなかった。みんな良い人。最高のメンバーがいる、最高のクラスで中学校最後の一年を過ごせることに、とてつもなく胸がワクワクした。

予想通り私は最高の生活を送っていた。行事も最高に楽しかったし、日々の授業も、みんなで遊びにいくのも、とりあえず楽しかった。思った通りの生活だった。

——夏休みが終わるまでは。

夏休みが終わるとみんな受験に向けてまっしぐら。遊びに行ったり、行事に集中することはなくなった。だんだんクラスには活気がなくなっていた。

もちろん悲しかった。でも仕方ないことだった。みんな今は自分が一番大事で、受験までは自分のことしか考える余裕がなかった。先生もそう言っていた。「受験までは、自分のことだけを考えなさい。志望校に合格したら、みんなとおもいつきり楽しみなさい。それまでは自分との戦いです」と。だから学校生活が楽しくないのは当然だった。

そんな中……

クラスの男子がある提案をした。

「あのさ、ゲームしない？」と。

みんなは反論した。ふざけるな、と受験なんだ、と。でもそのゲームの内容を聞くなりみんなはゲームに参加すると言い出した。

そのゲームとは——

ハブゲーム

・毎朝くじ引きをして、ハズレをひいた人が一日だけハブになる。
ルール

・「いじめられてる」と勘違いしないこと。

- ・度を過ぎたことはしないこと。
- ・ハブにされても途中で逃げないこと。

私は反対したが

みんなが賛成していた。私以外みんながやる気だった。だから次の日から、この残酷なゲームが始まった。

これがすべての始まりだったのだ。

ハブゲームは意外に楽しかった。反対してた私も結構楽しんだ。でも楽しんでることに罪悪感を感じることもあった。

ある日、私もくじ引きでハズレを引き、ハブになった。

ハブになった日は結構辛かったがそれでも「明日には元通り」と思うと、その日はなんとか乗り切れた。

ハブになるとみんなが敵に見えてくる。サユまでも私をハブにするのだから怖い。誰も話を聞いてくれないから休み時間と給食時間は特に辛い。本当に辛い。でも我慢する。我慢しなければならぬ。ルールがあるから。ゲームのルールを破ってはいけない。それくらい私だって知ってるから、ひたすら我慢を続ける。明日への希望をもつて。

次の日。普通にみんなが私と話してくれるようになった。ハブゲームは本当に一日だけなのだ。そして、朝みんなが集合するとくじ引きをする。目を瞑り神に祈る思いでくじを引く。

“ハブにはなりませんように”

みんながそう言っているようだった。声には誰も出さないが、ハブになりたくない思いがみんなから伝わってきた。

そしてその日のハブは……サユになった。

「サユどんまーい。んじゃスタート」

その掛け声でサユはハブになった。みんなサユをシカトする。サユは一人ぼっちになった。

かわいそうだな。とは思ったけど、仕方ない。コレがゲーム。こういうゲームなんだから。

「頑張つてね」

私はこっそりとサユに声をかけて、私もゲームに混ざった。

その日の放課後……なぜか私たちはみんな教室に残された。

「なんで？」「あたし勉強したいんだけど」「残されるとかまじ迷惑」

みんな塾がある。みんな忙しいのだ。みんな勉強しなければならぬ。だからイライラしていた。

そして私はサユがいないことに気づいた。

「ねえサユいない？」

私は周りの友達に聞いた。

「まじだ…いない。どこ行っただろうね？」

するとそこに……先生が入ってきた。

——サユと共に。

「ちょっとサユ！なにやってんの？」私は思わず叫んだ。でもサユはこっちを見向きもしない。

「みんなよく聞いて……！」先生が叫ぶ。

周りは妙な空気に包まれる。分けがわからなかった。なんで先生がこんなに怒っているのか、なんでサユが先生とくっついていいのか。そして先生が話をはじめた。

「私、久野（↑サユのことである）さんから報告を受けたの。いじめられてると。これは本当なの？このクラスにはいじめがあるの？」

サユは、先生にチクった。

周りがざわつく。先生がまたキレル。

「静かにしなさい！！みんな目を瞑って」

先生は犯人探しをはじめた。でも誰もいじめなんてやっていない。犯人なんていない。これはゲームなのだ。

「いじめをしています。してました。っていう人は手をあげなさい」

誰もあげるはずがない。だって、本当に誰もいじめなんてしていないのだから。ただの“ゲーム”をしていただけなのだから。

「わかりました。それがあなた達の思いなのね？誰も手をあげなかったわ。やったのにやっていないと言う。汚い人たちなのね？みんなは」

先生の言葉に私もついに怒った。その怒りを口には出さなかったが、だって本当に誰もいじめなんてしていないのに……

「久野さんはとても傷ついたんです。久野さんのご家庭と相談して今後久野さんがどうするか、決めたいと思います。みなさんとはまた今度しっかりお話をしたいと思います」

先生はそう言い、サユと共に立ち去った。

「ねえ……サユ、チクったんだよね？」

「まじ許せない」

「これはゲームだって、サユも知ってるくせに」

「アタシ、このゲームでサユにもハブられたよ」

「なんであんなこと……」

「サユ明日から学校来ると思う？」

「知らないよ！でももし学校に来たらそれなりの罰を与えなきゃね」
「ルール違反したんだから」

みんなサユにムカついていた。私はサユにもムカついていた。ルール違反者にはそれなりの罰が下る。これは社会の常識だ。だからサユにもそれなりの“罰”が下るのだ。

次の日、サユは学校に来た。トボトボと、元気が無い足取りで。私はサユに話しかけられた。

「おはよう」と。

でも私はシカトした。昨日のみんなとの約束どおり……

——昨日の放課後、サユと先生が立ち去った後。

「罰与えるって、どうやって？」

「“罰ゲーム”だよ」

「なに…するの……？」

「これやるッ」

すると、ひとりの女子が一冊の漫画を取り出した。今女子中高生で流行ってるいじめをテーマにした漫画だ。

その漫画にはとてつもなく残酷にいじめの様子が描かれていた。目を瞑りたくなるようなひどいいじめの様子が。作者自身が昔、いじめを経験してるからこんなリアルに描かれているのだという。

「こういうとき、サユにもやるっよ」

「あたし賛成！……！」

「あたしも！」

そしてみんなが手を挙げた。私は賛成じゃなかった。“いじめ”で罰を下すなんて間違ってる。それでも私の意見なんて誰も聞いてくれない。

この漫画の作者はきつと「世界からいじめがなくなっしてほしい」という思いで漫画を描いたのだろ^う。それなのに、それが本物の“いじめ”に利用されるなんて……。いじめがなくなっしてほしいという思いで描いた漫画がいじめのガイドブックになるなんて、作者は思ってもいないだろう。悲しい。

いじめは、その漫画通りに行っていた。
まずはシカト。全員でシカトする。
そしてサユは元気が無くなった。
みんながサユを睨み、笑う。

私は耐えられなくなった。そんなサユの姿を……そんな親友の姿を、
見ていられなくて、女子トイレに逃げ込んだ。
そして……ひとりで泣いた。

サユの私物は日に日にぼろぼろになっていった。教科書や鞆には大
量の落書き。私も書いた。

——裏切り者——と。

こんなこと間違ってる。とは思いつつも、でも周りには逆らえず書
いてしまった。

でもみんな本気ではない。誰も「死ぬ」と書いたからといって、本
気でサユが死ぬなんて思っていない。これはゲームの延長上の“罰ゲ
ーム”なのだ。
ルールを破った者に下される“罰”だった。誰もゲームで人が死ぬ
なんて思わない。いじめを受ける本人の気持ちは誰も理解していな
かった。

でも、私は知っていた。サユが放課後女子トイレの一番端の個室で
嘔吐していることを……

サユは相変わらず元気が無かった。もう先生にチクったりはしていない様子だった。

サユは先生の前では元気に振る舞い、心配をかけまいとしていた。先生はこのクラスに平和が戻ってきたと思い込み、生徒の中にしっこく首を突っ込むことは無かった。

空は暗かった。遠くでは雷が鳴っていた。風は穏やかだった。

「……あのさ、もうやめない？こんなこと」

私は恐る恐るみんなに言ってみた。本当にちっちゃい声で、聞こえたか、聞こえないかわかんないような小さい声で。

「え？ミキ今なんか言った？」やっぱり聞こえてなかった。

こんなことを二度も言う勇氣はない。「ううん、なんでもないよ」私は誤魔化した。逃げた。私の心にある“正義の気持ち”を隠した。

私は最近とても気分が悪かった。食事も喉を通らず、サユのコトを見るたびに心が痛んで、泣いた。

毎日泣いた。下校途中は必ず泣いた。その涙は、サユへの同情や弱い自分に対しての涙。周りに逆らえない自分が悔しかった。

ある日私は例のいじめをテーマにした漫画を買った。

その漫画を読むと、泣けた。ストーリー自体が感動できたし、そのストーリーは私のクラスにあるいじめを思い出させるものだった。

そして、その漫画の中で、いじめを止める役目のクールな女の子がいじめっ子相手にこう言っていた。

『あんた達ってさ可哀想。人をいじめることでしか自分を表せないんだね。なんのとりえもないからいじめをするんでしょ？本当可哀

想。自分の心をいじめでしか満たせない。自分の存在を表す方法が
“いじめ”しかない。あんた達みたいなのが世の中のクズなんだよ
ね」

その言葉に私はイラッとした。私はこの女の子に、クズと呼ばれた。
でも私はクズなんかじゃない。私はクズなんかになりたくない。
でも、いじめをしている以上は一生クズだ。私は……クズから抜け
出したかった。

心に“クズ”という言葉が響き渡り、そして私は決めた。ある決心
をした。

私はクズを抜け出す。

—— 次の日

天気は相変わらずだ。しかも今日は風が強い。雷が光る。

私は今日心にある事を誓ってきた。

漫画の、あの女の子のおかげで、私は一歩強くなれた。

本日付で私はクズを脱退します。

教室の扉を開けると、みんなサユへのいじめの準備をしていた。サ
ユの机に接着剤を塗っていた。

作業するみんなに向かって、私はこう言ってやった。

「もうやめようよ！！こんなこと」言った。これで私はクズを脱退
した。クズを脱退できた。

と思ったら……

「やっぱりね。あんたは裏切ると思ってた」ひとりの女子が言う。
そして私に接着剤のチューブを投げつけた。

「サユのコトかばってあげるんでしょ？エラーいね」

「別にそんなじゃない！」私は反発する。だって私はサユをかば
おうとかそんなカッコイイコトを言っつもりじゃない。ただ、クズ

から抜け出したかったただけなのだ。

「んじゃあサユのコトはもう許す。でも今度のターゲットは……」
みんなが微笑していた。

「あんたが今度のターゲットね」

……本日付で私はいじめのターゲットになった。

「きゃ！！！」

教室に入るなり私に水が降ってきた。
私の戦いはもう既にはじまっていた。

「おっはよー」サユ

クラスのみんなに歓迎されていたサユは戸惑いを隠せずにいるようだった。

だって今日から突然サユはいじめられなくなったのだから。

私はサユのほうを見つめていた。サユの変わりに、サユの身代わりとなって今日から私がいじめられる。そう思うと、サユを憎まずにはいられなかった。

サユと目が合った。それでも私はすぐ目を逸^そらす。サユは私のことを不思議そうに見ていた。一人ぼっちでいる私を。

私の教科書とジャージは即ぼろぼろにされた。

“死ね” “キモイ” “臭い”

落書きだらけになった。

そのうちにサユも私の敵になった。当たり前だ。だって私もサユをいじめてたんだから。仕返しされるのは当たり前。

いじめられると、とにかく困る。教科書とジャージはぼろぼろになるから買わなければいけない。もちろん買うのにはお金がかかる。だからお小遣いの減りがはやくなる。

お母さんに聞かれた。

「あんた最近お小遣いの減りがはやいんじゃないの？」って。言い

訳に困った。なんて言おう……教科書を買ってるなんて言えない。だから私はこう言った。

「最近友達と遊びに行くのが多くて。ごめんね。これからは気をつける」

元々私はこんな素直な子じゃないから、お母さんは不思議に思っている様子だった。

買っても買っても買っても汚される教科書とジャージ。汚される度に買ってたのではお小遣いが間に合わない。

お母さんにはなにも心配かけたくないし。だからお小遣いがある程度貯まるまではぼろぼろの教科書で授業を受けた。

体育がある日は、授業を休んだ。

いじめを受けると教科書を買に行かない日はとにかく暇だ。休みの日は受験勉強に集中する。

でも、普段の授業には集中できない。だって教科書がぼろぼろの時があるから。その時はまるで授業に集中できないから勉強に着いていけない。授業をサボることも多々あったから先生の評判は悪くなつた。

給食には墨汁を入れられるから食べられない。

それでも私は傷つかなかった。

過去に経験したハブゲーム。あれはたった一日ハブになるだけだった。

今私が受けている“コレ”も、ほんの数日で終わる。もう少しで終わるんだ。中学を卒業すれば終わるんだ。そう思うと心強くなり、傷つくことなく乗り切れた。

「ただいま」私が家に帰ると弟がテレビゲームをしていた。

「死ね！！死ね！！」テレビゲームの中の悪者に向かって“死ね”を連呼していた。

私はテレビゲームの線を抜いた。

「ちよつと姉ちゃんなにすんだよ！！！死ね」

弟に怒られた。そして弟はお母さんに怒られた。お姉ちゃんにそんなこと言うんじゃないかと。

「私テレビ見たいの」嘘だった。けれど仕方なくお笑い番組を見た。実につまらない。前まで大好きだったお笑いコンビなのに今はもう大嫌い。ネタが変わってしまったわけでもないけど、なぜか嫌いになってしまった。

そのコンビのツッコミのほうに、ボケのほうに「おまえ顔気持ちわりーよ」と言っていた。

その瞬間私は思わずテレビを消した。ツッコミの人は“キモイ”を連呼していたから。

「なんだよ姉ちゃんコレ見たかったんじゃないのかよ！」

「やっぱいいや。つまんないから」

そこにお父さんが酔っ払って帰ってきた。

「ただいまー」

「うわっお父さん臭っ」お母さんがお父さんに向かって“臭い”を連呼していた。

「ねえ、お母さん私ご飯いらないや」

「具合でも悪いの？」

「ちよつとね。部屋で横になってくる」

そう言う私は制服のままベッドに潜り込み、窓から見える細い月を見ながら

泣いていた。

悲しくなんかないのに、なんでだろう……

涙が止まらない。世の中には汚れた言葉があふれかえっている。そう思うと、

悲しくなんかないはずなのに、涙が止まらない。

私は大人しくいじめを受けていた。

……いや、いじめなんかじゃない。だって自分で“自分がいじめられてる”なんて言うなんてそんなの嫌だ。私はそんなに弱くない。いじめられてるなんて悲劇のヒロインが言うことだ。私は悲劇のヒロインなんかじゃない。そんなに弱い人間じゃない。

私は……ちよつとだけゲームの悪役を演じてるだけだ。

私は悪い人間。スーパーマリオで例えるとクッパ大王みたいな？それでみんながマリオ。この世の平和を守るために悪役を倒しているの。みんながヒーローなの。

あれ？でもおかしい……普通ヒーローは一人じゃないのか？なのにこのクラスには一人の敵に対してマリオが34人もいる……変だ。でも、まあいつか……

でも……これも変。それでも私は勝手に悲劇のヒロインになってる。というより、“被害妄想”だ。「私は敵になってる」なんて、ただの被害妄想。

私は被害妄想するような弱い人間じゃない。私はとりあえず弱い人間にはなりたくなかった。

でも、今私は全部をネガティブに考えてしまっていて……だから弱い人間でしかない。

ポジティブに物事を考えることができない。

もうわけがわからないよ……

強くありたい。ポジティブに生きたい。なのにポジティブに物事を考えられない。

辛い。なんで強くなりたいのに強くなれないの？

強くなりたい。なのに……

私の心はずーっと同じことしか思えない。同じ思いだけが私の胸を壊そうとする。

なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？

なんで強く生きれないんだよ！

なんで私強くなれないんだよ！

なんでこんなに弱いんだよ！

なんでなんだよ！！！！

私……なんでこんなに弱いのか？

誰か私を救って。

私の心を強くして。

誰でもいいから！

強く生きさせて。

強くならせて。

ビュー……

風が吹く。

足元がふらつとなった。涙が零れる。一粒だけ。

あとはもう泣かない。一粒の涙しか零さない。強くなるために、そう決めた。

学校の屋上。今日は学校が休み。部活をやってる人も誰もいない。

二粒目の涙が零れそうだった。

だから私は心を決めた。

涙が零れぬうちに……

飛び降りた。

——ピーポーピーポーピーポー

薄れ行く意識の中で救急車の音だけが聞こえていた。やっと死ぬんだ。

強くなつたんだ。
私の度胸を認めてほしいな、誰かに。

……右腕がズキズキ痛む。

ここは天国？それとも地獄？視界にはなにもない。真っ黒な、いいや正確には灰色の、汚い空が広がっているだけだった。

「死んだ後の世界にも空ってあるんだ」そう呟いた。

やがて雨が降ってきた。灰色の空が涙を流すように、しとしとと地味な雨が。

冷たい。

「死んだ後も温度は感じるんだ」

「死んだ後の世界でも雨は降るんだ」

そう呟いて目を閉じた。

目を閉じてすぐ、“ドン”という激しい音とともに身体にとてつもない痛みが走った。

「死んだ後も痛みって感じるんだ」

とは呟かなかった。

なぜって？

私は死んでなかったから。

ここは地球の、私の住む町だ。

あの時……

私は飛び降りた。そしたら、木に落ちちゃったみたい。

飛び落ちる最中に気絶したんだきつと。だから意識が無くなってっただんだ。

落ちた時木の枝で右腕の肘を擦りむいたみたいだけど、それ以外はどこも怪我してない。

そして、雨が降ってきて木の上の安定感は悪くなって、私は木の上から地面に落下した。

飛び降りたのが多分2時頃で、今は……携帯で時間を確認する。
5時過ぎだ。およそ3時間。誰も私に気づいてくれなかったみたい。
そして3時間もの間、私は木の上にいたんだ。

バカみたい

私は全身びしょびしょだ。それに髪の毛は葉っぱだらけ。服はボロボロ。

どうしよう……こんなんで家に帰れない。

と思ったけど、今は家には誰もいない。はずだ。

お母さんはパートに行ってるし、お父さんはまだ帰ってくる時間じゃないし、

弟はたぶん友達の家で遊んでる。

恐る恐る私は家に帰った。雨の降る中、びしょびしょで。

たぶんこの姿を誰かが見たらきつと私は

“可哀想な女の子”って思われるんだろうな……

全然可哀想なんかじゃないのに……と思いながら家に向かったけど今日は雨だし誰も出歩いてはいなかった。

だから誰にもこの無様な姿を見られることはなかった。

静かに鍵を開けて家に入った。予想通り家には誰もいなかった。キッチンからラスクとオレンジジュースを持って部屋へ向かう。ラスクは硬い。歯が砕けそう。超ム力つく。それでも頑張って食べる。だってこのラスク最高に美味しいから。

死のうとした私は最高にかつこ悪かった。だって髪も身体もボロボロ。私は強くなるために飛び降りたのに、強くなろうとした結果がコレ。

強くなろうとしたのに、「強い」の欠片もない汚い私の出来上がり。確かにもと私は汚いけれど……それでもなんか違う。スツキリしない。飛び降りたことにとても後悔している。外見が汚い私の、内面までも汚してしまったみたい。もしコレで本当に死んじゃったらどうなるんだろう？あの時ほんとに死んでたら、私“汚いまんま”死んでたってことだね？汚れた心臓を抱え、ボサボサで汚い髪の毛を身にまとい、身体には痣と傷。そんな姿で私は死ぬはずだった。

それを考えると涙が止まらない。

もう泣かないはずだったのに……あふれ出す涙。汚いままで死ぬなんて……絶対やだ。

それに、よく考えてみると私にはやり残したことが山ほどある。

好きな人見つけてないし、

キヤビアとかフォアグラとか食べてないし、

六本木ヒルズで買い物してないし、

『ここからここまでの商品全部ちょうだい』ってやってないし、

料理も洗濯もできないし、

宇宙旅行してないし、

それどころか海外にだって行ったこと無い。

デイズニールランド貸切にしてないし、

爪にお花とか飾ってみたい。

髪だって染めてないし、

芸能人と握手したことだってない。

朝一人で起きられるようになってないし、
ピアス開けてないし、

ニキビ治ってないし、
それに……
世界を平和にしてないし。

死んだらこんなことでもいいのかもしれないけど、
これをやらないで死ぬなんてもつたいない。

死んだら後悔なんてしないのかもしれないけど、
やらずに死ぬのはやだ。

世界には私の知らないことがまだまだいっぱいあるはず。これから
先やりたいことがいっぱいできてくるはず。それを私が体験しないで、
周りのみんなが楽しんでるなんて腹が立つ。死んだらどうなるかな
んてわからない。天国に行くのか、地獄に行くのか、灰になるだけ
なのか、

そんなのわからない。

でも、少なくとも“私”として生きられるのは“私”だけだから。
“山城ミキ”が“この世”で生きるのは、これが最初で最後だから。
この世界で体験したい。楽しいこと、おもしろいこと、全部全部全
部私が体験する。それをやらずに死ぬなんて……私だけバカな
んだろう。それで強くなかなれるわけない。それで楽になんかな
れるわけない。死んじゃったら楽しくも楽にもなれない。絶対に。
私の勘はあたるんだから。

山城ミキは欲張りな女だよ。欲張りらしく生きなきゃ！

だから、学校生活を楽しもう。

私なんでこんなに前向きになったんだろう？

私になにがあつたんだろう？

自分でもよくわからないけど、たぶん……

私は、根は元気でポジティブな女の子なんだよ！

——
きっと

私はポジティブ。自分にそう言い聞かせると、勇気が湧いてきて……
学校で戦う決心ができた。

「あ……」

この日、私は女子トイレでサユと会った。サユの目はとてつもなく怖い。

睨むように私のことを見つめる。

「なに？」

とても冷たい返事が返ってきた。

「別に…なんでもない」

私も同じく冷たい返事を返した。私とサユはもう関係ない。赤の他人。過去に親友だった事はもう無かったことであり、私もそんな事忘れていた。話す事なんてない。私が教室へ戻ろうとした時……

「そういう事されてどう思うの？」サユが私の手元を指差した。私は手に汚されたジャージを持っていた。そういえば私は女子トイレにジャージを洗いに来ていたんだ。

「どうして？」思いがけない質問に思わず質問で返事をしてしまった。

「傷つかないの？」

「え……」私はなにも言えない。もう二度とサユと一体一で会話することなんてないと思ってたから。

「傷つきは、しないかな。正直もう慣れちゃった」

平然を装って答えただけ、実際の声は震えていたと思う。

「そ……」

素っ気ない返事が帰ってきた。そしてサユは話を続けた。

「^{あたし}私がなんであんなの事いじめるのかわかる？」

「……ム力つくから？」サユの目は見れなかった。大きく見開いた目から鋭い視線がでていて、目が合ったら今にも殺されそうな、そんな目をしていた。

「まあ、それもある。でも……」サユは話を続けた。「仕返しなの」

「え？」

「私ちよつと前にいじめられたでしょ？そのときすつごく悔しかったの。」

ある日突然いじめられなくなったけど……でも私に対してのいじめが終わった後もずっとみんなを恨んだ。だから決めたの。私をいじめた奴みんなを、おんなじ目に合わせてやるって……。私さ、バカだから。自分がされて嫌なこと平気で人にしちゃうんだ……本当は自分が一番いじめの辛さわかっているんだけど。だからこそ仕返ししちゃうんだ……」

—— 2分ほどの沈黙の間があった。その2分間、サユは私を見つめていた。だから私も目を合わせて言った。

「それってさ……」

思わず私はサユに口答えする。

「それって本当にサユすつきりするの？」

「は？」

「別に自分をかばうわけじゃないよ。ただ……みんなに混ざってこそ私の教科書に落書きしたり、そんなんで本当にサユの私に対する恨みって消えるのかな？第一サユが恨んでるのは私だけじゃないでしょ？他のみんなは？他のみんなにはいつ痛みを与えてやるの？」

「……なにが言いたいなの？」

サユの視線は相変わらずだ。

「サユ、可哀想だよ。本当は殴って仕返ししたいんじゃないの？小さい落書きなんかじゃなくて……」

心からの同情だった。本当にサユが可哀想で……。可哀想で可哀想で可哀想だった。あんな小さな仕返ししかできなくて……。
そんなサユが口を開いた。

「だって私…強くないから……。先生にすぐチクるし、自分がされて嫌なこと人にしちゃうし、周りに逆らえないし……。私ミキみたいに強くないから……。」

きつと私を含めたみんなへの恨みの涙だろう。

——涙をこぼすサユを、気づいたら私は抱きしめていた。きつくきつく抱きしめた。

「強くなる必要なんてない。強くならなくていいの。いつも“自分”であればいいの。自分をしっかり持ち続けて。やりたいようにやればいい。周りに従う必要なんてないんだよ？仕返ししたけりや殴っていいの。周りはいろいろ言うかもしれない。それでも、サユであればいいの。」

強いから周りに逆らえるとか、弱いから周りの言いなりとか、関係ない。そもそも強いも、弱いも関係ない。ありのままのサユでいれればいいの。サユ？仕返ししたいんでしょ？私に。じゃあ私を殴ってもいいよ。強く、強く殴って。何度でも殴って。サユの恨みが晴れるまで殴り続けて」

私にこんなこと言われても説得力ゼロだね。

でもサユはその後私を殴った。グーで、力強く。

私はなんだか嬉しかった。

サユ……ありがとう。

サユはその後転校した。北海道にある中学校に。

サユのお父さんの仕事の都合で前々から転校する予定ではいたらしいのだが、サユのわがままで少しの間だけ引越しを先延ばしにしてもらっていらしい。

でも先日、サユが転校してもいい。とお父さんに話したため、4日前サユは飛行機で北海道へと向かったみたい。

会うつと悲しくなる。だから私は見送りには行かなかった。そして今日、サユから手紙が来た。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

To: M i k i

ミキ、ありがと。そしてゴメンね。

私^{あたし}あの時ミキを殴って思った。コソコソしたいじめなんかで仕返しはできない。

心にあつたミキに対しての恨みとか、憎しみとか、そういうの全部いじめなんかじゃ

解決できないんだよ。ミキを殴って、それを思い知ったの。

いじめなんかで、私の心が晴れることはなかったんだと思う。いじめなんか、無意味だったの。

正々堂々面と向かつて痛みを与えて「私も今までこんなに痛かったんだぞ」って

面と向かつて知らせてあげないと、自分の心はずっとモヤモヤなままなんだよね。

いじめで仕返ししたって、全くスッキリしない。

それをミキに教えてもらった。

今ならもうミキを許せる。他の奴らはまだ許せないけど。それでももう忘れる！

もう絶対いじめなんかしない。

ミキは私の親友だよ？私をもう一度笑わせてくれたただ一人の親友。離れてても、信じてる。

頑張ってるね。すごく辛いと思うけど。でもミキには親友がいるんだから。

私っていう、頼りないバカみたいな親友がいるんだからね。

お互い頑張る！

私もこっちの学校で頑張るね。

From : Sayu

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

私はその手紙を読みながら……涙を流していた。

私に親友ができた。

たった一人の、大事な親友。

サユは今頃どうしてるかな？新しい学校で頑張ってるのかな？

サユが頑張ってるなら、私も頑張らなくちゃ。

いつてきーす。

家中にそう響かせて、私も今、戦場に旅たつ。

戦場Ⅱ学校に着くと、いつもと様子が違う。

私の上靴がちゃんときれいなまま下駄箱に入っているのだ。
いつもならばグチャグチャにされているのに……。

おかしいな？と思いながら教室に入ると、私は一人の女子に声をかけられた。

「おはよ」って。

私はビックリした。思わず「おはよ」って返すのを忘れた。

でも、私はある事に気づいた。

そう。本日付で、私はターゲットから外されたのだ。

そして、同じクラスのアカリがみんなからシカトされていた。たぶんみんなの気まぐれだろう。

ターゲットが変わるのに理由なんてないんだ。ただの気分。

アカリはクラス一小さい女の子。笑顔がとても可愛くて、妹みたいな存在。

いじめなんかに参加するようなタイプじゃないけど、たぶんアカリは周りの人に巻き込まれて私やサユにあんなこととしていたんだと思う。そんなアカリが今度のターゲットだ。

一人の女子が噛んでいたガムをアカリに吐きつけた。

「……ひどい。なんで？昨日まで私達仲良かったじゃん」

アカリは泣きながら訴えてた。アカリの傍にあった机とか椅子とか、全部倒してアカリは女子の集団へと向かっていった。

「ねえ、なんでなの……？」

アカリの涙は、とても激しく。とまることをしらない勢いで流れていた。

「今なんか聞こえたー？」

「わかんない」

「空耳かなー。まじ耳元うざいし」

「きもーい！なんかいるんじゃない？」

「うわつきも」

みんなはそう言いアカリを相手にしなかった。

そしてその女子たちはアカリの机に……生卵を割っていた。

きれいな黄色い黄身がちょうど机の真ん中にある。ゆらゆらとアカリを嘲笑うかのように黄身がゆれている。

アカリは吐きつけられたガムを指でつまみ、そして口に含み、まずそんな顔をして喉元を通した後で、雑巾を持ち机を拭き始めた。

アカリの目からこぼれる涙、鼻からこぼれる鼻水が白身と混ざり、もはやなんの液体かわからない透明の液が机の端からこぼれ始めていた。

みんなアカリを見つめ、そして笑う。冷たく、冷たく笑う。

私は見ていられなかった。そんなアカリを。

私も雑巾を持って机や床を拭いた。

すると……小声でアカリが私にこう言った。

「どうせあんたも後で私を裏切るんじゃない？だったら優しくなんか

しないで」

と……。

アカリは、人が信じられなくなっていた。

そして私は、アカリに信じられてはいないみたいだ。

そしてその日の放課後、私はクラスの女子に呼び出された。

「なに？」

私はクラス的女子4人に鋭い眼つきで問いかける。

「あんたさ、なんなの？アカリの事手伝ったりなんかしちゃってさ」

「別にいいでしょ？私がなににしたって勝手じゃん」

私はあくまでも落ち着いて、そして堂々とした態度で姿勢を構える。

「まじうざい。超うざすぎ。あんたの事もやっちゃうよ？」

ここでの「やる」とは多分「いじめをする」ってことだと思う。

「……勝手にすれば？もうあんたらなんか怖くないから」

事実、私はもういじめなんか怖くない。慣れたから。いじめなんか、慣れたから。

慣れたから……慣れたから……。

「あつそ。んじゃ、アカリと一緒にオマエも死ね」

立ち去る4人の背中を私はきつと鰐わにのような鋭い目で見つめていたはず。

そして、その目からは……なぜか知らないけど、涙が零れ落ちた。

次の日から私はずっとアカリと一緒にいた。

私はアカリを守ろうと決めたんだ。酷いいじめからアカリを救ってあげるの。

まあ私もいじめを受けているけど、でも……私はいじめなんかじゃ傷つかないから。傷つかないはずだから……耐えられる。

てか、アカリの事を守るために耐えなきゃいけないの。私なんか「守る！」って言われたからといってアカリは心強くななんかならないと思うけど。それでも、決めたから。守らなきゃいけないから……

アカリは毎日のように酷いことをされていた。

アカリの前髪がなくなり、それと同時に私の前髪もなくなる。
アカリの教科書が汚され、それと同時に私の教科書も汚される。
アカリの机に菊の花が置かれ、それと同時に私の机にも菊の花が置かれる。

私とアカリはいつも同じ時所にて、同じことをされて過ごした。

そしてある日私達は学校にあるごみ倉庫に閉じ込められた。
埃が舞い、嘔吐物の臭いがし、いるだけで身体に悪いような場所だった。

そんな場所で長い間沈黙が続いて……アカリは私にこう囁いた。
「……あんたさ、迷惑。はつきり言って邪魔だから。あんたのやってることはただのお節介だよ。前も言っただけ……どうせ裏切るんだったら、優しくなんかしないでよ!」

って。はつきり言っただけはかなり傷つく言葉だった。

でも、仕方がないよね。アカリは今人が信じられなくなっているんだから。

いじめのせいで、人が変わっちゃってるんだから。いじめは人を変える……恐ろしいものだ。

「……ごめんね。お節介で。だけどね、私は絶対アカリを裏切らないから。私はアカリが大好きだから。嘘はつかないよ?絶対に。信じて。お願い。アカリ?大好き」

そして私はアカリを抱きしめた。強く、強く抱きしめた。

「……信じない」

アカリは涙声で私にそう言った。二人でずっと泣いていた。

そしてその日、掃除当番によつてごみ倉庫の鍵が開かれるまで、
ずっと二人で泣いていた。

12（前書き）

今回、後半に同性愛的要素がでてきます

ごみ倉庫に二人で閉じ込められて、アカリは少しずつだけ私に心を開いてくれるようになった。

お弁当も一緒に食べてくれるようになったし、一緒に買い物に出かけるようにもなった。

サユとアカリ。私には二人の友達ができた。本当に心から信頼できる親友が。

でももちろんアカリは100%で私を信頼してくれているわけではないだろう。だって、アカリみたいに優しく、今まで人を信じることしかなかったような純粋な子は、裏切りには弱いから。アカリみたいな子が“裏切り”で受けた傷はそう簡単には消えることは無いから。

そんな事はわかってる。でも私は、アカリが私に笑顔を見せてくれる。それだけで嬉しいんだ。

私たちは二人でいつも笑っていた。だからみんなにはいろんな酷いことをされた。でも二人だから乗り越えられた。私もアカリも涙を流さなかった。なにをされても二人で笑っていた。

私達は“親友”だ

そんなある日、私はインフルエンザにかかってしまった。

39.0の高熱。具合が悪くて何度も嘔吐した。お母さんが作ってくれるゆず湯以外なにも口に入らなかった。メールを見る余裕もなく、4日間ひたすらベッドの中で寝ていた。

「あれー？今日あんたの相棒いないみたいだね」

「今日であんたの相棒が学校に来なくなって4日目だよ」

「ミキ、インフルエンザとか言ってアカリの事見捨てたんじゃないの？」

「かわいそー。裏切られたんだね。アカリは人を見る目がないからね」

「たぶんあいつもう学校来ないんじゃない？」

「ミキは逃げたんだね。アカリを見捨てて」

「アカリ、一人ぼっちになっちゃたねー」

4日ぶりに私は学校へ向かった。まだ少し熱っぽいけど、寝込むほどではないから。

教室に着くと周りの異変に気づいた。

みんなの目がいつもより怖い。口元は笑っているのに、目の奥になにか薄暗い残酷さを感じる。

そして……アカリがいない。

どこにもいない。

「ねえ！アカリは？」

教室中に響く声で、手に汗を滲ませ、額に汗を滲ませ……。

「アカリは今頃屋上だよね……」

みんなの笑い声が聞こえる。

なに？なんなの？今頃……？屋上？アカリ！待ってて！今行くよ！
なんだかわからないけど凄い胸騒ぎがして、平常心を保っていられ

なくなつた。身体中汗だらけ。

バンツ！！と大きな音を立てて屋上の扉を開いた。

……アカリは屋上のフェンスの外側に出ていた。

「ちよつとアカリ？なにやってんの？」

息切れしながら飛び出しそうな心臓に手を当ててアカリに尋ねる。

静かに風が吹き、少し間が開いた後アカリは消えそうな声で言った。

「アタシ、死ぬから」

「え？」

ごみ倉庫の時以来初めて涙が零れた。身体中をびしょびしょにして
いた汗は、知らぬ間にひいており、その代わり涙が溢れる。

「だってミキ私を見捨てるんでしょ？」

「何言ってるの？」涙が止まらない。まともに声も出ない。

「ミキ、私を置いて逃げるつもりだったんでしょ？いじめられるこ
とに耐えられなくなって私だけを置いて逃げようとしてたんでしょ
？」

「……………」

チャイムがなつた。それでも私達はその場を動かず、妙な距離を保
つたままずつとそこにいた。

「アカリ……みんなになんか言われたでしょ？」

「……………」

「アカリがみんなになんて言われたか知らないよ。ただどね、私ア
カリを置いて逃げたりなんかしない。現にこうして学校に来てるじ
ゃん。アカリ前に私がいるじゃん！信じて？私はアカリを裏切った
り、逃げたりなんかしない。だって……アカリ私の親友だもん。親
友を裏切ったりなんか、しないよ？」

私は静かにフェンスへと歩み寄った。

「アカリ？」

そう静かにアカリに声をかけると、アカリは振り向いてくれた。

そしてアカリは言った。

「でも、私やつぱり……もうミキのこと信じられない！」

——その瞬間！

バンツ！と激しい音を立てて思いドアが開いた。

「あ、ちよつとあなた達こんなところでなにやってんのよ！」

先生が屋上に私たちを迎えにきた。

「授業サボって、しかもそんなところにいて……危ないじゃない！」

先生は怒鳴り声を響かせ、私たちの元に近づいて来た。

——私達は保健室に連れられて来た。

酷く疲れているようだから。という理由で。

自殺しようとしてたの？

なにか悩みがあるの？

お母さんに相談したほうがいいんじゃない？

と聞かれたが、アカリは「風を浴びたかっただけです。家にはなにも言わないでください」

と答えていた。その、先生とアカリの会話を私はベッドの中で黙って聞いていた。

「本当に大丈夫なの？」

「はい。本当に風浴びたかっただけなんです。心配しないでください」

「わかったわ。あなたがそこまで言うなら。じゃあゆっくり休みなさい」

アカリが私の隣のベッドに潜り込む音が聞こえた。

そして、バタンツと保健室のドアが閉まり、先生が出て行くのを確認すると私は静かに目を瞑った。アカリに言われたあの言葉を、あの現実を、瞼で押し殺すように、静かに目を閉じた。

「ミキ？」

アカリが私に声をかけてくれた。目を瞑ったまま私は返事をした。

「ん？」

「あのさ……ごめんね」

「どうして謝るの？」

たったカーテン一枚で区切られているだけなのに、カーテンの向こう側がとても遠く感じる。

「だって私、ミキを信頼してないから。ミキは私を信頼してくれるのに、私は……」

アカリが鼻をすすする音が聞こえた。アカリは泣いている。

私は目を開いた。そして……

アカリの寝ているベッドにうつり……

アカリとキスをした。アカリの柔らかい唇に私の唇を重ねた。

それは、別にレスビアン（同性愛）のつもりもなく、ただ今私がアカリを暖めてあげたくなったから。唇を重ね、きつく抱きしめた。

「ミキ……？」

私は唇を外してアカリに伝えた。

「一回だけ、チャンスをちょうだい？」

「え？」

「もう一回だけ、私を信じて。私は絶対にアカリを裏切らない。お

願い。一回だけ私を信じて」

「……わかった」

思い切ったように、アカリは答えてくれた。きっと今のアカリにとって私を信じるのは難しいんだろけれど、もう一度だけアカリは私を信じてくれる。ありがと。アカリ。アカリが私のことを“親友”って思ってくれるように、私、頑張るね。

〽公立高校一般入試5日前〽

アカリと私が一緒にいるところをみんな不思議そうに見ていた。きつとみんな私たちの友情を壊したつもりなのだろう。だけど壊れない。壊させない。

そんな中今日の教室の様子はいつもとは違う。皆必死に勉強していた。朝も、休み時間も昼休みも。

そう、受験の日が刻々と迫ってきていたのだ。推薦入試で合格した子もいるがクラスに3人程度。大半の人は5日後に迫った一般入試に向けて熱心に勉強している。

“いじめ”は無くなった。

学校をサボったことや、授業をサボったことがある私は推薦などあり得ない。まあ、それなりに勉強はしているからレベルはそこそこの高校を狙っているが、ハッキリ言って先生には「無理」と言われている。だけど、今の私ならなんとなく「不可能」を「可能」にできる気がするから……。

〽公立高校一般入試4日前〽

この日私とアカリは静かな近くのアミレスでアルバイトのお姉さんに注意されるまでドリンクバー一杯で3時間勉強した。

帰りにゲーセンに寄ってプリを撮り『志望校絶対合格』の文字を書き込んだプリクラを二人で携帯に貼り付けた。桜色のシャープペンシルもお揃いで購入し、受験の日にはこのシャープペンシルを使うことを約束した。

「私たち、志望校違うけど絶対合格しようね!」

アカリが私の手を握りながら言ってくれた。

「そだね！でも……なんか、寂しいね」

卒業まで一週間も無い。高校に行けばまた新しい友達もできるし、いろんな出会いがある。でも、いろんな別れもある。そう思うと、「なんて無駄に時間を過ごしてきたんだろう」って後悔だらけで……涙が溢れた。もっとみんなと仲良くしたかった。綺麗な教科書を使っていたかった。毎日学校に楽しく行きたかった。涙が止まらない。後悔しか残らない。

「ミキ？まだ時間あるよ！受験が終わったらさ、デイズニーランド行こうよ。悲しむの早いよ」

アカリのその一言で私は涙をふき取った。そう、確かにまだ悲しむのは早い。

すると

「あつヤバイ……」アカリが肩にかけているオレンジ色の鞆の中をゴソゴソとしながら呟いた。

「どうしたの？」

「ヤバイ……お母さんに頼まれたお菓子買ってない」アカリはそう言つと鞆から今朝の新聞に入っていた折り込みチラシを私に見せてくれた。最近有名になっているロールケーキだ。チラシの中のロールケーキは優しいクリーム色をしていて、真っ白い生クリームをスポンジが優しくロールしていた。私は生クリームが好きではないため食べたことはないが、うちのお母さんが食べているのを見たことがある。

「これ、あそこ方のケーキ屋さんで売ってるんだよね？」アカリはそう言い横断歩道を挟んだ向こう側の青い屋根のお店を指差した。

「だと思つよ。買ってくるの？」

「うん。すぐ戻ってくるね。ちょっとここで待ってて」

「わかった」私はベンチに腰をかけ走っていくアカリの後ろ姿を見つめていた。

そして……アカリが横断歩道を走りながら渡り始めたその時、猛スピードで大型のトラックがアカリに向かって走って来た。

「アカリ……！」

私は大きく目を見開いてアカリに叫んだ。歩いていた人達が一斉に私を見た後、皆私の視線の方向に目を向ける。アカリに私の声は届かない。そして次の瞬間……

「キキイイイ！」と激しい音をたてトラックがスリップして止まった。そして、トラックの側には女の子が倒れていた。

「……アカリ」

思わず鞆や、手に持っていた荷物をみな投げ捨て野次馬をかき分け野次馬の中央で横たわっているその女の子に抱きついた。

「アカリ……！アカリ……！アカリ……！しっかりしてよ……！」

何度もアカリの身体を揺さぶるが返事がない。

「……救急車」

私がそう呟いても周りはざわつくだけ。

「ねえ、救急車！なに黙って突っ立ってんの？早く救急車呼んでよ……！」

口からは涎が、鼻からは鼻水が、目からは涙が止まらない……。

「公立高校一般入試3日前」

ピンク色のカーテンから零れる太陽の光。

外で光っている太陽を遮るカーテン。

埃が宙を舞う私の部屋。

暗い私の部屋。

頭を掻くと髪の毛が抜ける。フケが落ちる。

携帯に貼ってあるプリクラを見ると、携帯を壁に投げつけたくなる。誰もいないキッチンに下りて、冷蔵庫の扉を開ける。

お父さんが買っていたカップ焼酎を取り出し、リビングのテーブルに置いてあるお父さんの煙草を持って二階に戻る。

カップ焼酎の蓋を開く。口に含み、ゆっくり喉元を通す。

——不味い。

それでも、自分を抑えられないから飲み続ける。

咽る。

それでも、飲む。全部無くなるまで飲む。

すぐに頭が痛くなった。

次は煙草だ。

キャンドル用の燐寸を取り出し煙草に火をつける。

大きく息を吸うと奇妙な煙が口の中に、喉の中に、肺の中に入ってきた。

すぐに煙草を口からはずした。

咳が止まらない。

——不味い。

私……なにやってんだろ……。

「ただいまー」

お母さんが帰ってきた。

時間を目覚まし時計で確認する。PM5時。

昨日の夜から今まで、ずっとカーテンを閉め切って酒飲んだり煙草吸ったりしてたんだ。

「お母さん！アカリ知らない？」

頭が痛いけど、酒や煙草をやったなんてお母さんには言えないから
元気なふりをしなきゃいけない。

「……ミキ」

お母さんが俯きながら喋ってる。

「どうしたの？」

お母さんの顔色を伺う。

そして、

「ミキ！知ってるでしょ！アカリちゃんは……天国に逝っちゃった
の」
って……。

私はお母さんの頬を強く叩いて部屋に戻った。

アカリ……。

大っ嫌い。

私は、部屋のカーテンを開いてみた。

外はもう暗く、細い月が時々雲に隠れながらも懸命に光っていた。

東京の星は少ないというけれど、今日はなんだかいつもより星がきらきらしているように見えた。

——アカリはあそこにいるのかな？——

目立ちはしないけれどそれでも優しい光を放っている星を見つけた。なんとなくアカリに似ている気がした。あれがアカリ。アカリを見ていると涙が出てきそうになった。だけど必死に上向いて涙が零れないようにした。だって、アカリは優しい子だから私が泣いているのは自分のせいだ。って思っちゃうかもしれない。自分で自分を責めちゃうかもしれない。だから涙は流さない。少なくともアカリが煌く夜は泣かない。

だけど……。やっぱり悲しいよ。もっともつとアカリと思い出作りたかった。もっともつとプリクラ撮りたかったし、駅前のお店のジャンボパフェも食べたかった。二人で高校合格を喜びたかった。お互い彼氏作って、Wデートもしたかった。二人で旅行とかもしたかったね。もつと笑いたかった。ずっと二人でいたかった。なのに……。なんで？なんで先に逝っちゃうの？どうして私をひとりにするの？ひとりはやだよ。ひとりは寂しいよ。ねえアカリ！置いてかないでよ！私これからどうすればいいの？誰とお弁当食べればいいの？誰に勉強教えてもらえばいいの？学校や家で辛くなったとき誰に電話すればいいの？私今気づいたけど、友達アカリしかいなかったんだよ？アカリがいなくなったら私本当にひとりぼっちじゃん！どうすればいいの？

いつも二人だったから「寂しい」なんて感覚感じたことなかった。「寂しい」なんて感覚忘れてた。でもアカリがいなくなっただけで改

めて思うとあの頃の、ひとりぼっちだった頃の記憶が蘇ってきた。
思わずカーテンを閉めてアカリと目を合わせないようにして、泣いた。

ひとりになるんだってことに改めて気づいて、泣いた。声を出さないように、静かに、静かに泣いた。

コンコンッ

ドアをノックする音が聞こえた。涙を拭いて鼻をすすって「はい」
って涙声にならないように返事をした。

「ミキ、入るわよ？」

ガチャ、とドアが開いた。ほんのりカレーの香りがする。

「はい、カレー。ミキ今下に降りる気になれないでしょ？」

「……うん」

お母さんは私が今まで泣いていたことに気づいていたのかな？いつもと変わらない笑顔で私に話しかけてくれる。さつきとても強くお母さんを打ったのに、そんなこと気にしない様子で……。

机にお盆を置く音が聞こえた。

「じゃあ後でお皿取りに来るから」

そう言って部屋を出ようとしたお母さんを、私は思わず引きとめた。

「待って」

「え？」

「ココに……いて。ひとりになるのが……怖いの」

——すると、

ほわっとお母さんの暖かい匂いがした。そして全身が暖かい温もり
に包まれた。

お母さんが、私を抱きしめてくれた。

「お母さん……。」

……涙が一粒零れた。

「お母さん…私、怖いの……」

お母さんの温もりを感じて、お母さんの前では絶対に泣くまいと思っていたのに、一瞬で目から大粒の涙が溢れた。

「大丈夫よ。お母さんが付いてる。ミキにはお母さんがいる」

お母さんは私の頭を優しく撫でてくれた。すっかり爪は切ってあって、丸い指先が私の髪の毛を包み込むように、優しく、優しく撫でてくれた。

「ミキ。アカリちゃんはまだちゃんと生きてるよ？」

「え？なに言ってるの？」

お母さんは私を慰めるためだろうか、まるでテレビドラマや小説に出てくるであろう言葉を言い出した。お母さんごめん。私そんなこと言われたって涙は止まらない。

「ミキ。私はね死んだ後どうなるかなんて全くわからない。そういうのの専門家でもない。だけどね、アカリちゃんはきっとミキの心に生きてるんだと思うよ？」

「どうして……？」

涙を拭いてお母さんの目を見つめた。

「だってミキ、アカリちゃんのことちゃんと思い出せるでしょ？笑ってるアカリちゃん。泣いてるアカリちゃん。怒ってるアカリちゃん。いろんなアカリちゃんを思い出せるでしょ？アカリちゃんはミキの心にちゃんと生きてるの。思い出せるってことは、ミキの心にアカリちゃんがちゃんと“存在”してるってことなんじゃないかな？」

“存在”……私は思わず心に手を当てた。死んだ人が今もまだ心に生きてる。なんて馬鹿馬鹿しい。だけど……「もしもココにアカリがいるなら」そう思うと、なんか心強くなれる気がした。私とアカリは一心同体なんだ、って思えた。

「ミキにはアカリちゃんが付いてる。お母さんだっている。なんにも怯えることないんだよ。嫌なお友達とか、人間関係は大変かもしれないけど。」

「え……？」

「どういうこと？嫌なお友達って……。もしかしてお母さん……。」

「私、一応ミキのお母さんよ？知ってる。ミキが学校で戦ってるってこと。……ううん。正確には気づいた。かな？」

「お母さんは気づいていた。私がいじめを受けていたこと。」

「どうして？」

「だって私、ミキのお母さんだもん。気づくわよ。ただ、少し気づくのが遅かったね。ミキの心の傷を癒してあげられなかった。ごめんね。ダメなお母さんだね……。」

「そう言うときはお母さんが涙を流した。」

「だから私は指でお母さんの涙を拭いて、強く抱きついた。」

「今まで言わなくてごめん。これからはちゃんと相談するね。お母さん、大好き。お母さんはダメなお母さんなんかじゃない。」

「口いっぱいカレーを含み、涙で少し塩味になったカレーを飲み込む。やっぱりお母さんのカレーは美味しい。」

「……明日からは、ちゃんと学校に行く。」

〈公立高校一般入試2日前〉

今日はいつてもよりも早起きした。というよりは早く目が覚めた。昨日の夜寝たのは夜中の2時。起きたのが5時だから……3時間しか寝ていない。だけど私の身体は全く疲れていない。眠気もない。ただ学校へ行きたかった。誰に会うためでもない。学校には私の友達はいない。ただ逃げたくないから。みんなから逃げたくないから、今日は教室に一番乗りしてやるんだ。私はあんなにたなひきに負けない。そう訴えてやりたいんだ。大切な“人”がいなくても私はちゃんとやっていける。私の心にはちゃんとアカリがいる。アカリの“魂”がある。みんなちゃんと見てて。アカリの姿はなくても、アカリと二人で、同じ身体で、みんなに正々堂々ぶつかるから。制服を身にまとい、今日の授業の用意をし、朝ごはんを食べ、普通学校へ行くのより30分も早く家を出た。

——アカリ。行くよ！

朝、私は狙ったとおり一番乗りで学校に着いた。

アカリの机はちゃんとあった。撤去されることなくアカリの机がちゃんとあったことに感謝した。みんなでちゃんと卒業するっていうのが、先生の想いなのかな？きつと卒業式では誰かがアカリの写真を持って式に出ることになるのかな？アカリもちゃんと卒業するんだ。

私が学校について20分ほどしてから、教室にぞろぞろと人が入っ

てきた。みんな始めは少しビックリしていた。私が普通に学校に来ていることを。きっとみんな私はショックで寝込んでいるとも思ったのだろう。けどほとんどの人は今は自分が大切。私なんかにかまっている暇はない。自分の席に着き、受験に向けて必死で勉強している。

私は、あんたたちから逃げないんだぞ？目で一人ひとりにそう訴えた。

授業がはじまる。アカリと一緒に買った桜色のシャープペンシルで授業を受ける。みんな必死。私も必死。人生がかかった受験がもう目の前まで迫っているから。私はアカリと一緒に受験を乗り越えるんだ。今まで、いろんなことアカリと乗り越えてきた。きっと今回だって、二人で乗り越えられるんだ。

今日一日、私はお母さん以外の誰とも喋らなかった。

学校では心の中のアカリとしか喋らなかった。

でも、みんな私をシカトしていたんじゃない。みんな自分のことで精一杯だったんだ。

それが私にも伝わってきた。

明日も、私の教室は静かになりそうだ。

きっと今日以上にシーンとするだろう。

でもそれは、寂しいんじゃない。普通なんだ。いじめはない。

誰も傷つかない。

これでいいんだ。

これがいいんだ。

受験前の教室の雰囲気なんてこんなもん。

明日も、私はアカリと二人で過ごさだろう。

みんな……

明後日の受験。

頑張ろうね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9200f/>

リアルゲーム

2010年10月13日17時09分発行